

少年団による関東大震災後の活動 —「野外少国民学校」の取り組み—

圓 入 智 仁

Activity of Boy Scouts just after the Great Kanto Earthquake: The Establishment of Temporary Open-Air Schools

Tomohito Ennyu

(2016年11月25日受理)

1. はじめに

1923(大正12)年9月1日に発生した関東大震災の直後、少年団日本連盟は被災者の救護活動を行うとともに^[1]、被災した子どもたちへの支援の一環として、「野外少国民学校」を開設した。これらのことは、ボーイスカウトの50周年記念誌において、「東京市内数カ所に野外少国民学校の開設、救援品の配給、被災少年少女の慰問または震災に関する教育資料の出版などを計画・実行し」と記述され^[2]、全国の少年団から被災児童に救援品、教科書、文房具や慰問文などが送られ、それらを野外少国民学校の子どもたちに配給したとしている。

関東大震災の発生は、前年4月の少年団日本連盟発足直後であった。連盟のトップ(総裁)は後藤新平が務めており、後藤は総裁就任当時、東京市長(1923年4月27日まで)の任にあった^[3]。さらに彼は、震災発生直後の同年9月2日に発足した第2次山本権兵衛内閣で2度目の内務大臣に就任し、同月27日に設置された帝都復興院の総裁にもなった。

田中治彦による少年団に関する研究では、文部省内にあった少年団日本連盟の事務所が震災によって全焼したこと、復興院内に「復興ボーイスカウト」を設置して東京市内の少年団が関わり、市内5ヶ所に「野外少国民学校」を開設したことなどを指摘している^[4]。ここでは「野外少国民学校」が復興ボーイスカウトの最大の事業であり、「ボーイスカウト夜学部」という位置づけで日曜を除

く毎日、午後7時から9時まで英語や地歴などの授業を行い、さらにその前後の時間に商業やスカウト作業実習などを行っていたとする。

しかし実際には、少年団は野外少国民学校を昼間に開設していた。ボーイスカウトの記念誌など公的な記録にも「復興ボーイスカウト」や「ボーイスカウト夜学部」などの言葉は登場しないことから、上述の「夜学」は、震災復興にあたって検討された案の1つだったと考えられる。

学校と教育の観点から関東大震災と阪神・淡路大震災を比較研究した岸本肇は、関東大震災発生から小学校の再開までの間、本研究が扱う「野外少国民学校」が6カ所で開設されたことを、内務省社会局による『大正震災志(下)』(1926年)に依拠して指摘している。ただ、ここでは「被災直後の最長で20日間程度、罹災した複数校の子どもが、暫定的にそういう場所で授業を受けていた模様である。」と指摘するにとどまり、その内実を検討するには至っていない^[5]。これは、岸本が震災後の教育改革や徳育に関心を寄せているからであろう。

その他に、加藤理は関東大震災後の子どものストレスと文化活動の観点から、「野外少国民学校の歌」に着目して、その歌詞を掲載しつつ、「少年団日本連盟主催の野外少国民学校の児童の意気を上げるために作られた校歌である。次のような歌詞の歌を子どもたちは大歓迎したと記されている(9月28日付東京朝日新聞)」と紹介している^[6]。加藤は子どもの罹災状況、ストレス反応、児童

別刷請求先：圓入智仁，中村学園大学教育学部，〒814-0198，福岡市城南区別府5-7-1

E-mail：ennyu@nakamura-u.ac.jp

[1] 少年団の救護活動に関する映像が近年、発見された。「関東大震災 新たな映像 4本発見，少年団・救護班の姿」『日本経済新聞』2014年8月31日社会面。

[2] スカウト運動史編さん特別委員会『日本ボーイスカウト運動史』ボーイスカウト日本連盟，1973年，75頁。ボーイスカウト東京連盟運動史編集特別委員会『日本ボーイスカウト東京連盟運動史』日本ボーイスカウト東京連盟，1988年，47-48頁。文献によって、「野外少国民学校」と「野外小国民学校」の、2通りの表記を見ることができる。前者の表記を採用している例が多いようであるが、両者に大きな意味の違いはないと考える。

[3] 後藤が東京市長を辞したのは、ロシアとの外交に専念するためであったとされる(鶴見祐輔『後藤新平』第4巻，1938年，376-383頁)。

[4] 田中治彦『少年団運動の成立と展開』九州大学出版会，1999年，187-189頁。

[5] 岸本肇「学校と教育から見た2つの震災—関東大震災と阪神大震災の比較考察—」『東京未来大学研究紀要』第3号，2010年，1-8頁。

[6] 加藤理「関東大震災下の子どもの震災ストレスと児童文化活動」『東京成徳大学子ども学部紀要』第1号，2012年，1-16頁。

を対象とした調査記録に触れつつ、子どものケアを目的とした文化活動を紹介する中で「野外少国民学校の歌」について言及している。

以上の通り、先行研究では「野外少国民学校」に関する指摘はあるものの、具体的な活動については未知な部分が多い。これから、大小様々な地震が発生した後の、子どもの支援のあり方を考える上でも、本研究において、関東大震災後に少年団日本連盟が展開した「野外少国民学校」の実態と、被災児童に対する支援のあり方について解明することは、意義のあることと考える。

2. 野外少国民学校の概要

野外少国民学校については、震災発生翌年の1月に、文部省で社会教育を担当していた乗杉嘉壽が報告している^[7]。乗杉は関東大震災後の学校教育について、「今回の災変に於ても学校方面の事は、只名ばかりの調査に恬然として何等事業開始の具体的方案をめぐらさず、公私共只困つたものとの一言に、あたら貴重の『教育的タイム』を空費した傾きがある。(中略)如何なる異変に遭遇するも、一般教育、就中普通教育の一日も忽にすべからざるを信ずる吾人は、這般の光景を觀てまことに傷心の情に堪へなかつたのである。」と述べている。学校教育が動かないのであれば、それに変わって社会教育が動こうという意気込みを読み取ることができる。さらに乗杉は、「殊に一冊の教科書もなく、見るもの聞くもの凡てが只恐ろしき大惨禍に心の底まで異常の衝撃を受けた、あはれ数万の罹災児童の姿を觀ては、そが心理的に道徳的に、はた教育的に将来する甚大の結果を思ふまでもなく、身苟も教職に在る人々が、晏閑として徒らなる一片同情の言葉に籍口して、あたら可憐の教へ子を具体的に救はんとせざるかを、むしろ聖代の一大恨事として、憤慨の情禁じ得なかつた。」とまで述べ、学校教育現場の教員に対する非難の言葉を続けている^[8]。

乗杉は震災から一週間、半月が過ぎてもこのような状況は変わらなかったと言い、「教育界は死んだ子の年を数

へるばかりで何の企てもない。茲に於て我が文部省社会教育課は決然として奮起し、主催者少年団日本連盟を後援し、一面断たれたる勉学の途に應急的施設を行ふと共に、他面救護慰安の意を兼ねて、罹災少国民の臨機的教育に任ずる事となつた。名づけて『野外少国民学校』と云う。」と、文部省内に事務所を置いていた少年団日本連盟の後援をするという形で、社会教育として「野外少国民学校」を開設すると宣言している。

少年団日本連盟側の記録がほとんどないため、この野外少国民学校の発案者や、資金調達者、運営の中心人物が文部省側なのか、少年団側なのか、判然としない。ただ、震災直後で乗杉による上述の考えに対して、少年団側が実働部隊として援助していたというのが実際の構図であり、全国組織が発足直後の少年団日本連盟が主催者で、文部省が後援するという役回りは、発足直後の少年団を全国的にアピールする手段の1つだったと考えることもできる。実際に、乗杉が課長を務めていた社会教育課(当時は第四課)が新設された1919(大正8)年6月の時点で、課には課長の他に属官3名、嘱託数名が所属していたという^[9]。その4年後の震災発生当時に、どれだけ課員が増えていたのか不明だが、乗杉たち計画者が、野外少国民学校の実働部隊として、身近な少年団に目を付けたと思われる。

少年団の資料によると、野外少国民学校を開設する目的が「多数罹災少年少女に対し救護慰安となし不安の念を去らしめ兼ねてその心身の修養をなさしめ社会奉仕の念を養はしむるため」となっている^[10]。罹災児童の「救護慰安」だけでなく、心身の修養や社会奉仕の念を養うことまで含めていることが確認できる。

3. 野外少国民学校の場所・講師・教科

乗杉によると、野外少国民学校は「主として罹災民の集合せる場所を撰び」、下の表にまとめた6カ所に設置された。表1と表2の通りである^[11]。なお、表1の児童数と教員数は、延べ数ではなく実数と思われる^[12]。

[7] 乗杉嘉壽「焦土の帝都に咲いた教育の花 野外少国民学校」『社会教育』1巻1号、1924年1月、24-28頁。この記事については、松田武雄も『近代日本社会教育の成立』(九州大学出版会、2004年)で触れている(288-289頁)。

[8] 被災した児童数について、震災発生当時、台東区浅草にあった富士小学校の教員は、震災の記録を残す中で、震災地には196の小学校があり、そこに25万人に近い児童が通っていたといい。震災で117校が焼失し、被災児童数は約15万人だったと報告している(増子菊善・酒井源藏『樽を机として』誠文堂書店、1923年、2-10頁)。これによると、隣接町村や他県へ避難した児童、死亡児童などの調査は困難を極めたようである。

[9] 松田『近代日本社会教育の成立』前出、283頁。

[10] 後藤新平関係文書、少年団関係09「少年団事務雜 案内、次第書、趣意、規則、事業決算報告、名簿、行事予定、各種通知書」にある「野外少国民学校開設要旨」。

[11] 表1については前出の乗杉の報告を一部改変し、表2については、後藤新平関係文書、少年団関係09(前出)にある「野外少国民学校便り」を一部改変した。

[12] 「野外少国民学校訪問記」(『少年倶楽部』10巻11号、1923年11月、225-228頁)には、「日比谷新野外音楽堂」で開いている日比谷野外少国民学校を訪問した記録が掲載されている。ここに、「斯うした児童達は、各少国民学校に約三千名収容してあるさう」であると記されていることから、表中の児童数計2,770人は、実数であると思われる。他にも、新聞記事で「生徒は目下一箇所に各二百名位で尋常一年より中学女学初級位である」(「文部省の野外学校 小国民を教育する」『読売新聞』1923年9月22日朝刊3頁)、「約二千五百名の罹災児童を集めてゐる」(「野外少国民学校の歌 罹災学童鼓舞のために」『東京朝日新聞』1923年9月28日夕刊2頁)などと報じられている。

表1 野外少国民学校一覧

学校名	場所	開校日	閉校日	児童数	教員数
日比谷 野外少国民学校	日比谷公園内	9月19日	10月10日	457	27
九段 野外少国民学校	九段靖国神社境内	9月19日	10月7日	283	26
浅草 野外少国民学校	浅草観音付近	9月20日	10月12日	650	21
芝野少国民学校	芝公園内	9月20日	10月14日	825	31
深川 野外少国民学校	深川霊岸小学校跡	9月24日	10月11日	500	17
大塚 野外少国民学校	大塚高等師範学校内	9月20日	10月9日	55	5

表2 9月24日現在の野外少国民学校一覧

場所	主任の人数	指導者数	児童数
日比谷公園	1	12	350
芝公園	1	28	405
浅草公園	1	12	280
靖国神社	1	20	160
深川霊岸	1	12	400
高等師範内	1	1	40

日比谷野外少国民学校などの開校前日の9月18日、読売新聞が「罹災少国民を救ふ野外学校を設く」という記事を掲載した^[13]。ここでは、10月上旬までの約20日間、「日比谷公園九段坂上上野公園浅草観音芝離宮本所(場所未定)等」(原文ママ)において、1組を50名として「若干組」作ること、生徒にはノートと鉛筆を与えること、「文部省社会教育課の人々少年団日本連盟の幹部及び各大学専門学校学生の特志者」(原文ママ)が指導者となること、その中に少年団の三島通陽や小柴(博のことか)、文部省の乗杉社会教育課長や片岡(重助のことか)が含まれていること、事務所は大塚高等師範学校内の文部省社会教育課に置くことなどを報じている^[14]。実際に本来の学校

が再開したのが、浅草区で10月1日、本所区で10月15日だったことから^[15]、野外少国民学校を10月上旬で終了するという見込みは、大きく外れたものではなかった。

乗杉の報告によると、実際に、各学校には文部省社会教育課の課員が主任として配置され^[16]、少年団員や「男女各大学及専門学校学生生徒並有志等」が教師を務めた。例えば日比谷野外少国民学校では、「先生は女子師範の方や、一高(倉知氏)や慶大(木村氏)や高工(寺田氏)や早大(五十嵐氏)などの有志」が務めていた^[17]。また、「中等学校、小学校教員篤志者」の活躍も期待された^[18]。しかし、「教育専門家にて募集に応ずる者の比較的少数であった」ことに乗杉は、「今さらに怪訝の念に堪へぬと共に遺憾に思ふ」とする。

表1の期間、毎日午後1時から3時までの2時間を授業時間としていた。教科としては講話、国語、算術、体操、遊技、唱歌、童話等を設定し、他にも「児童にふさはしき簡易な社会奉仕的指導」に取り組んだ。5、6年生には、地理や歴史、理科の授業もしていたようである^[19]。また、「野外少国民学校開設趣旨」によると、授業料などは一切必要なく、鉛筆、雑記帳、画用紙などの学用品は少年団日本連盟が「贈呈」することになっていた^[20]。

4. 九段野外少国民学校の1日目と2日目

次に、乗杉の報告に基づき、九段野外少国民学校の初日(9月19日)と翌日のプログラム等を見ながら、実際の様子を把握したい。

初日は場所の選定、児童召集、教場の設備、学級編成、始業、教員会議というプログラムが設定された。具体的には、以下のことに取り組んだ。

[13] 「罹災少国民を救ふ野外学校を設く」『読売新聞』1923年9月18日朝刊2頁。

[14] 読売新聞は上野公園にも開設すると報じているが、本稿で扱う野外少国民学校は、上野には開設されなかった。ただ、東京市下谷区役所による『下谷区史附録大正震災志』によると、上野公園内には野外少国民学校のような「臨時小学校」が以下の8校、設置されたという。またそれぞれに100名から200名前後の子どもが参加したと言うが、どれくらいの期間にわたって設置していたのか、また「日曜学校」のように日曜日だけ、あるいは1回限りのものだったのかなどを含めて、それぞれの詳細は不明である。

これらの「臨時小学校」と、本稿では扱う野外少国民学校が混同して理解されていたことは、以下の文章からもわかる。「識者は国民教育の一日も忽にすべからざるを思ひ、焼出されたる学童のために百方尽力奔走して、上野や浅草に少国民学校を開始した。後藤子爵等の後援により、石橋利三郎氏等は、美術学校の松林の中と、傳法院とに、九月十二日から、罹災児童を集め、衣類や、履物、雑記帳、鉛筆などを給与し、七名の教員と共に、修身、国語、算術等の学課を授けてゐる。」(増子ら『樽を机として』(前出)、37-38頁)。

[15] 増子ら『樽を机として』(前出、42頁)には、浅草区富士小学校が10月1日に再開したとある。他の情報は、東京市役所『東京震災録(別輯)』三秀社、1927年、100-111頁(岸本「学校と教育から見た2つの震災—関東大震災と阪神大震災の比較考察—」(前出、1-8頁)から再引用)。

[16] 乗杉の報告の通りだが、正確には、「第四課」だろう。同年12月25日に、第四課は社会教育課に改称している。

[17] 「野外少国民学校訪問記」(前出)、226頁。

[18] 後藤新平関係文書、少年団関係09(前出)「野外少国民学校開設要旨」。

[19] 「野外少国民学校訪問記」(前出)、226頁。

[20] 後藤新平関係文書、少年団関係09(前出)「野外少国民学校開設要旨」と「礼状」。これらの資料から、連盟の総裁である後藤新平の名前で、野外少国民学校に対する金品の寄贈を募っていたことがわかる。

上野公園内の「臨時小学校」一覧

主宰	校名	場所	開放・閉鎖	教師
希望社	野外国民学校	東京美術学校々庭	9.12	5名 1日3時間
本派本願寺	上野子供学校	—	9.12	—
上野輪王寺	臨時小学校	輪王寺大師堂廟所 広間	9.19-10.15	黒門・竹町・山伏小学校訓導、僧侶、女子大生、上野高女生
本派本願寺	臨時小学校	9.20 博物館前 10.30 清水堂脇	9.20- 13年3.31	市より教師派遣
希望社	臨時小学校	竹の台バラック内	9.20	—
上野寛永寺	国民小学校	寛永寺内	9.27	—
本派本願寺	上野日曜学校	—	10.中旬	—
同	林間学校	上野公園	11.13	—

- (イ) 靖国神社境内能楽堂前広場樹陰を利用して校地と定む
- (ロ) 靖国神社々務所並東京府女子師範学校の好意により机、長腰掛、長莫蔭、小黒板、黒板拭、「オルガン」、「フットボール」、運動用小輪等を借用し急造教室場設備の資とす。
- (ハ) 教員各自手分けして罹災避難家屋「バラック」等を戸別訪問し「宣伝ビラ」を配布して児童を募集す。集るもの忽ちにして百余名。
- (ニ) 学級の編成、基本学科目、学科主任、各組担任等を定む
- (ホ) 午後二時半野外少国民学校開催の趣旨並今回の震災に対する詔勅、御沙汰書の大意を敷衍して、主任より一場の講話をなし後児童一同少年団の遊戯をなす
- (ヘ) 終業後教員会議開催。お互に第一日の予想以上の成功を祝ひつゝ、教材、教具、並に時間割等につきて協議し午後四時半閉会

小石川区竹早町にあった東京府女子師範学校は、後述する野外少国民学校々歌を作曲した大和田愛羅の勤務校であるが、九段の靖国神社まで直線距離で2キロほどであろう。また、九段の靖国神社付近の「罹災避難家屋」を戸別訪問したというが、その時に配布したと思われる「宣伝ビラ」には、以下の記述があった。長いが引用しよう。

少国民諸子

大地震から大火災で幾万といふ人がなくなりました。東京市の小学校の先生方でも百八十人もなくなれたさうです。また幾十万の人が命からぐ漸く逃げのびました。皆さんもさぞびっくりされたことでせう。しかし決して落胆してはなりません。これから精一ぱい働けば食ふに困るやうなことはありません。更に又精を出せば家や財産はいくらでも出来ます。かけかへのない命を捨てた人々に比べて見ればこれからうんと働いて人の為世の為に尽さなければなりません。

心を落ちつけてあの大地震以来の事を考へてごらん下さい。お米の飯のたき方がまずいと云つたり、おかずがおいしくないと云つてお母さんを苦しめはいたされますまい。そこです。人間はいつどんな事に逢はぬとも限りませんから平生からその心掛であ

表3 九段野外少国民学校2日目(9月20日)の時間割

	第一時限	第二時限	第三時限
	午後1時から 午後1時30分まで	午後1時40分から 午後2時10分まで	午後2時20分から 午後2時50分まで
松の組 (尋5,6以上、男)	葛原齒氏の童話	震災につきての綴方	衛生作業(作業は境内の庭掃除)
桜の組 (尋5,6以上、女)	同	同	唱歌
杉の組 (尋3,4)	同	同	地震のお話
百合の組 (尋1,2)	同	同	図画

なければなりません。

学校もたくさん焼けました。皆さんはしばらく不自由をしのばねばなりません。学校が出来るまでは毎日この野外少国民学校で勉強しませう。この学校の先生方はみな親切な人ばかりですから、何でもわからぬことはどしくご相談下さい。

文部省内

少年団日本連盟

野外少国民学校に子どもを募る文章であるが、3段落構成のうち、1段落目で震災の事実を述べた上で、これから精一杯働くことを説いている。2段落目で震災以降の生活を振り返らせ、普段の生活における心構えを説いている。最後の3段落目でようやく、学校再開まで野外少国民学校に来ることを勧めている。

さらに2日目の9月20日の時間割を次の表3で確認する。

2日目は1時限目と2時限目が、各組共通して葛原の話の聴き、震災に関する綴方に取り組んだ。葛原は野外少国民学校々歌の作詞を担当しており、大和田愛羅による作曲と併せて、子どもたちが始業前や終業後に毎日、合唱していた^[21]。また2日目には、歯科医の教員による歯痛の児童の治療や、他の教員による児童の理髪なども実施した。

乗杉によると、児童に対する活動としては他にも、「蓄音機を聞かしめ、『タオル』其の他の日用必需品を与へた。また、彼岸の中日には、子どもたちに「キャラメル」を配布したようである^[22]。

5. 児童中心主義と生活綴方

この野外少国民学校に文部省社会教育課長として携わった乗杉嘉壽には、欧米視察の経験があった。松田武雄によると、乗杉は、米国の小学校における「児童中心

[21] この曲については、加藤「関東大震災下の子どもの震災ストレスと児童文化活動」(前出)において、「少年団日本連盟主催の野外少国民学校の児童の意気を昂げるために作られた」、あるいは「被災児童を励まし、心を鼓舞する内容である」として、歌詞とともに紹介されている。なお、葛原は九段精華高等女学校教諭などを務め、「とんび」、「キューピーさん」、「たんぼぼ」などを作詞した。また、大和田は当時、東京府立女子師範学校兼府立第二高等女学校の教諭、「今は山中 今は浜」で始まる唱歌「汽車」の作曲者である。

[22] 後藤新平関係文書、少年団関係09(前出)「野外少国民学校便り」。

主義」の教育に着目して、日本の学校教育に対して「教育の実際化」論を提唱していた^[23]。乗杉の主張する「教育の実際化」論は、いくつかの論点を含んでいるが、第1の論点が「学校教育それ自体の実際化」であり、そこには、学校教育の社会の実生活と密接の関係を持つこと、そのために教育の内容・方法を実生活に合わせて改革すること、実際的な教育内容にするために教師の自由裁量の余地を増やすことなどを提案していた^[24]。

その乗杉が野外少国民学校において、「切れた下駄の鼻緒は自分で繕ひ、嬉々として教室に当てられた莫産を運び、楽しんで庭を掃くなど、児童各自の自律自制の精神に、幾度か快心の微笑が教師其の人の顔に浮かんだであらう。画帳なき図画教授には自由画の神髓が発揮せられ、教科書なき算術教授には、実際的应用問題の活用が遺憾なく行はれ、児童を野外に引き出したとて問題が生じ、教材が死んで居たとて教授法を批難さるゝ事は夢にもない。」という実践を見続けた。野外少国民学校では、「教授時間の如き、教材の如きを初めとして其他のこと、到底普通小学校の例に倣ふことは出来ない。否さうすることを欲しない。凡てのことは教師の自由と児童の個性とより出で、そこには自然のまゝにのんびりとした温い、型になずまない気分が横溢して居た。かくて期せずして児童中心主義の教育が実現せられた」のである^[25]。

乗杉による児童中心主義あるいは教育の実際化の考えは、野外少国民学校において取り組んでいた生活綴方にも関係している。この学校に通っていた小学生の綴方を引用する。

僕のしんばいごと^[26]

瀬川信義

この間大きくわじがありました。そして着物をみなやいてしまひました。これから夏になるならさほどしんばいもないが、冬になるのでしんばいでなりません。なにしろ着物を一まいもださないのですから、僕は子供だから、さむくなれば、あばれゝばあつくなるけれど、お父さんやお母さんはあばれるわけにはいきません。僕が十八とかいふなら、しごとでもして父母にわたいをこしらへてきせませんがまだ十一

なのでどうにもなりません。それがしんばいで、毎夜さうねたことはありません。

子ども達が自らの生活経験を綴り、その内容を子どもたちで共有し、話題として意見交換をしていたのであろう。

教師と子供達の関係について乗杉は、「素人の先生、青天井の学校、教ふる人は平素教授法の一頁だに読まぬ人、それにいかめしい教壇もなければ、経費の不足をこぼちつゝ備へた標本もない。而して教へらるゝ者は罹災児童の烏合の衆である。しかも自ら自己破滅を体得せる教師、災厄の惨事に学び屋を恋ひ慕ふ可憐の児童、そこには、一片弟相愛の美しき真情の貫通がある。」と表現している。具体的に乗杉は、「十月七日に閉校した某学校の某教師の述懐の一部」(原文ママ)を引用している。

生れて始めて会つたつらい思を、小さい体に而も私以上に知つて居る気の毒な子供等と、昨日はゆつくり話し会ふことが出来て、どんなにうれしかつたかわかりません、「先生御別れしたくないんです」涙なしには居られませんでした、泣いて物語る幼い彼等と十四日の午前八時に、用のない人達丈集つて遊ぶ事に約束しました。「眼鏡かけた先生きつとですよ」と叫びつゝ、小おどりして我家へと走る子供等は、どうぞ幸にあつてくれと祈るのでした。

「教育は元來心の仕事である」あるいは「教育者と被教育者との間に於いて、心魂一路が相通ずる」ことを重視する、乗杉にとって、野外少国民学校における教員と、教員の名前を覚えていない子どもたちの交流は忘れられない光景だったのだろう。

6. おわりに

2016年4月の熊本地震が発生した後、被災各地で子どもたちの心のケアや学習を支援する取り組みが広がっていることを、新聞各紙が報じている^[27]。とりわけ、休校により通学できない児童生徒に学習の機会を設ける取り組みとして、学習塾の無料開放や、大学生による勉強の指導に関する報道もある^[28]。このように、被災した子ど

[23] 松田『近代日本社会教育の成立』(前出)、267-274頁。以下の乗杉による「教育の実際化論」も、松田の論考に基づく。

[24] 第2の論点が「学校の拡張事業」、第3の論点が「社会の中心機関としての学校の運動」、第4の論点が日本の学校教育の非効率、画一性、形式性への批判である。

[25] 乗杉「焦土の帝都に咲いた教育の花 野外少国民学校」(前出)。ここで乗杉は、「其の目的に於て、其の方法に於て、聾々耳を聳せんばかりに叫ばるゝ現代教育の理想とも云ふべきものが、極めて容易に、極めて自然に、草を座席の素人教師のもとに滞りなく実現せられたと云ふことは、何たる快心の事であらうか。」と、自らが掲げる児童中心主義や「教育の実際化」論の実現を述べている。

[26] 「野外少国民学校訪問記」(前出、227頁)所収。

[27] 例えば、「避難の子供 心身ケア」『日本経済新聞』2016年5月5日社会面。

[28] 例えば、「塾や大学生、勉強サポート」『日本経済新聞』2016年5月5日社会面。また、「被災地の子 学び支える 熊本地震」『朝日新聞』2016年6月17日教育面。

もたちの心身のケアだけでなく、学校に通うことができないことを補完する取り組みも、各地で実施されていた。このような取り組みは東日本大震災後にも見られるものであり、本稿で解明した通り、関東大震災後にも行われていた。

関東大震災後、「野外少国民学校」を開設したのは少年団と文部省第四課（社会教育課）であり、熊本地震や東日本大震災後にも、被災児童が学ぶ環境を支援したのは、民間の塾、ボランティア、NPO 団体などであった。これらのことにより、社会教育として震災発生後、学校が再開するまでの間に子どもたちの居場所を確保し、勉強したいという気持ちを叶えることができると示された。もちろん、学校教育は被災児童に関する情報の収集と学校再開を目指した取り組みに全力を尽くすことが求められる。その間に、社会教育の立場で、被災した子どもたちの生活や経験に基づく教育を展開することができるのである。

関東大震災後の少年団の取り組みにおいて、地震に被災した子どもたちに、「精一杯」生きること、また、「平時から非常時の心がけ」を考えさせることができる。さらに、被災した子どもたちが自らの将来を能動的に開拓していくことも期待していた。乗杉はここに、自らが提唱する、「教育の実際化」を見出していたのであり、これらのことは、これから発生が予想される地震後の被災児童救援活動において、大いに参考になると考える。

本研究は JSPS 科研費 JP15H01985 の助成を受けたものです。